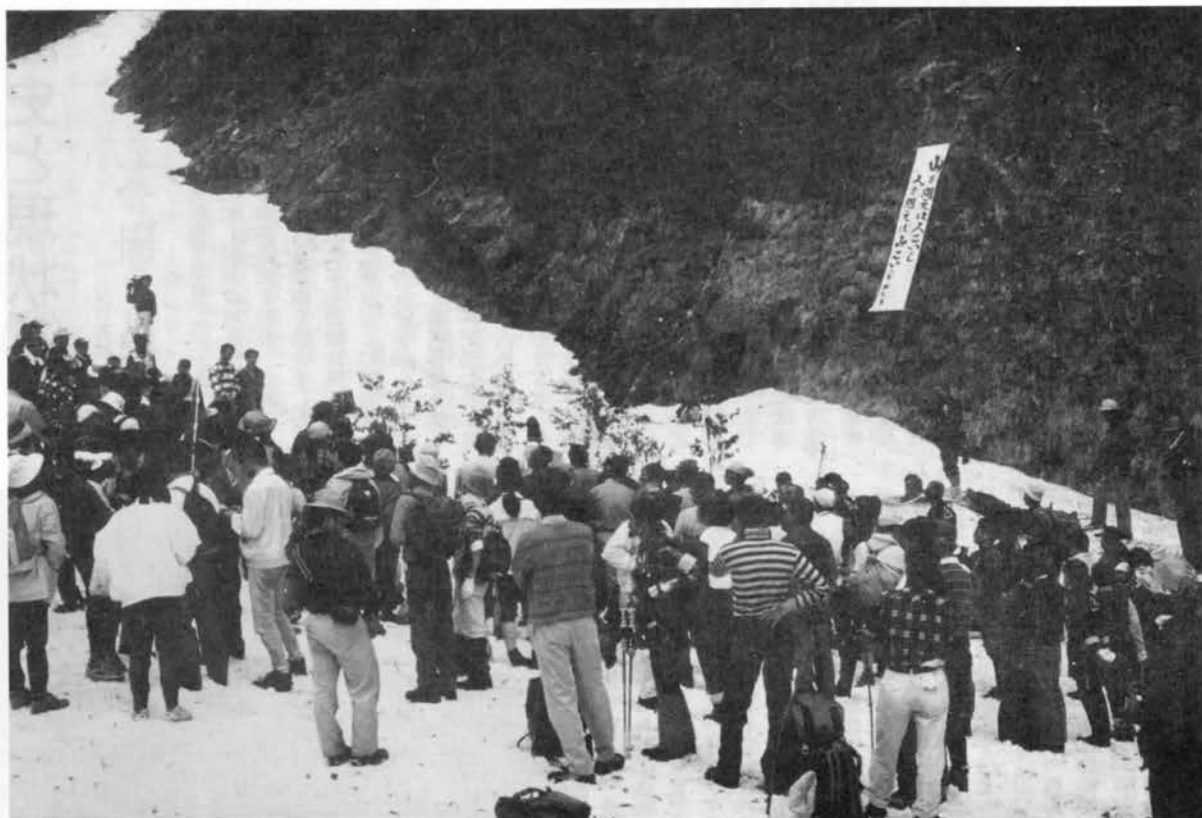


山と博物館

第38巻 第6号 1993年6月25日

大町山岳博物館



第36回慎太郎祭

百瀬慎太郎への旅

飯島 喜久代

最近、私は北アルプス黎明期の登山史を下から支えていた百瀬慎太郎の伝記物語を上梓することができた。私一人の力ではない。たくさんの方々の好意に支えられてのものであった。とりかかっただけから、とんでもない事に手を染めてしまったと後悔したが、慎太郎の生涯を知ろうとする行為は、たまらなく魅力的な事でもあった。

「山を想へば人恋し 人を想へば山恋し」というのは、慎太郎が愛したことばであり、彼を見知る人々が共感し、後世に伝えようとしてきたことばである。その前半部分を私は本の題名としてお借りした。ところが、その題名を見て、「このことばは、たしかどっかで聞いた事がある。だれかのことばをやたらと使えば盗作だっというて怒られやしねえかや。」と心配してくれた方がいた。その話を聞いたとき、私はとてもおもしろい興味深い現象がおこっているのだと思った。「百瀬慎太郎」の名前は知らなくても「山を想へば……」のことばは記憶にとどめている人がいるのである。

ある年齢以上の人々の心の中には、青春時代あるいは幼年時代の思い出とともに、対山館とその周囲の情景が住みついている。

一方、たとえば今の小学生、中学生たちは百瀬慎太郎の名前すら知らないという者がほとんどであるようだ。(無理もない。「慎太郎祭」を「金太郎祭」と呼んだおとなを私は知っている。)

考えてみれば、私がしようとした事は、すでに独立の生命さえもっている「山を想へば……」のことばと百瀬慎太郎の生き様とをもう一度結びつけてみることであったと思う。そのことばの源を訪ね探す旅であったのだと思う。

(大町市在住)

北極の開発・歴史と現状(後)

太田 昌秀

第二次大戦後は長い東西の冷戦が続きました。この期間、北極海は米・ソが直接対峙する前線になり、この海域の制海・空権を確保するために両陣営は表から見えない激しい競争を展開してきました。一九五九年にはアメリカの、一九六二年にはソ連の原子力潜水艦が北極点の氷を破って浮上しましたし、アメリカはグリーンランド北岸やアラスカ、ソ連はフランツ・ヨーゼフ諸島に航空レーダー基地を作って睨み合いました。この中で、一九四六年八月、アメリカ空軍はアラスカ北方に淡

路島より大きな大氷島を発見し、一九五一年から極秘のうちに氷上観測基地を作って北極海を漂流しながら調査研究を始め、そのうちの一つT-3は十数年も観測を続けました。一方、ソ連は一九三七年北極横断飛行の気象観測のため九ヶ月間北極点近くに観測所を作りました。そして、一九五〇年からはSP-1・2……と名づけた氷上漂流基地を次々と作り、一九九一年にはその数が三十三に達しています。基地がのっている大氷島は海流のついでアメリカ側では時計まわり、ロシア側では反時計まわりで漂流し、北極海の大部分をカバーして、氷に覆われた海盆の性質を次第に解き明かして来ました。かつてナンセンが単一海盆と考えて来たこの海は、中央近くを横断する海底山脈によって二つに分けられており、(写真1)ロシア側は約六〇〇

〇万年から拡大を始めた大西洋と一緒にできた海ですが、アメリカ側は一、五億年より古い海盆です。

海流や低気圧による南からの熱の供給と、氷による北からの寒さの南下の様子が判つてくると、(写真2)北極前線の動きが北半球の気候を最も大きく支配していることが判つてきました。また、暖流と寒流のぶつかる北大西洋北部でできる大量の重い冷たい水が、大西洋の低層流になってインド洋をまわり太平洋北部まで連なっていることも判りました。

南から流れ込んでくる大気は、最後には北極の空で雪と共に汚い物を地上へ戻すので、北極圏の汚染を調べることは、北半球の大気汚染を大きな視野で監視することになります。また、北上する暖流と広いシベリアや北米北極圏の大河から運び出されてくる真水の中で生存している生物の中にも、当然汚染物質が見つかり始めています。極寒の地の生態系は温暖な地方と比べるととても単純なので、研究には都合が良いのですが、シロクマやセイウチのような巨大な哺乳類がどんなふうに移動し繁殖しているのかさえ、実はまだ判っていないのです。(写真3)

一九八七年バレンツ海の中央西部の島で、夏営業する海鳥の数が、前年の25万つがいから3.6万つがいに激減しました。(写真4)この時はバレンツ海のシシャモの漁獲料も激

減し、すぐに禁漁になりました。ノルウェー人はシシャモを食べる習慣はなく、主に魚粉にして養殖動物の餌にしていたのですが、一九七〇年代に日本の商社がシシャモの買付けを始め、北ノルウェーではシシャモ長者ができるほど大きな収入になったのです。この大量捕獲が一九八七年の激減の主因ではないにせよ、かなり大きな原因になったことは事実です。タラは一九八四年・八五年の大量捕獲で、ニシンは一九六九年の獲り過ぎなどのため近年不漁が続けてきましたが、一九九一年頃から両方共回復し、シシャモも海鳥も此頃は一九八四年のレベルに戻ったと言われています。

単純な食物連鎖の中では一種の変化の影響がすぐ全体に現れてくるのです。この海域では一九八九年にソ連の原子力潜水艦が沈んで



写真-1 北極海の海底地形図

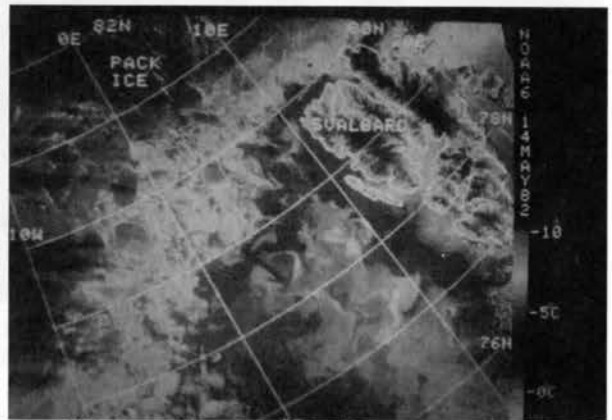


写真-2 スピッツベルゲンとグリーンランドの間の海流



写真-3 無線機をつけて白熊の移動を追跡

います。また、ノヴァヤ・ゼムリアの西及び東の浅海にはソ連が使い古した原子炉を20〜30も投棄しており、これらがいつ風化して放射性物質を海中に流しだすかわかりません。

ノヴァヤ・ゼムリアの中央部には、ソ連最大規模の原水爆実験場があり、バレンツ海南東のコラ半島には原子炉と原子力潜水艦基地があつて、その上いくつかの大鉱山の精錬所が毒々しい色の煙を吐きつづけています。似たような有害物垂れ流しは、ソ連時代の北極海沿岸やシベリア各地で行われており、環境に対する配慮は全くなく、人間の健康さえかえりみられないのですから、まして他の生物の生態系保護などはほとんどありません。

その上これらによつてもし地球温暖化が起るとしたら、今ツンドラの下で三〇〇メー



写真-4 ビョルン島南岸に営巣する海鳥(1986年)

トルもの深さまで凍っている永久凍土が解け始め、その中に冷凍されていた有機物が分解して大量のメタンガスを放出することになります。メタンガスは炭酸ガスの十倍もの温室効果をもつていますので、地球温暖化が一層早まるでしょう。このような人為による極地環境の乱れは、地球規模の大きな影響を生ずることになり、それ故に多くの研究者達が今、極地に注目しているのです。極地の大気圏には外にも問題があります。最近の高層物流の研究からまず日本の昭和基地で一九八〇年代にオゾン層の減少が認められ、北極地方でもそれが著しいことが判り、今年の一月は北緯六〇度のオスロでも二〇パーセント減という最低値が出ています。今日上空に現れているオゾン・ホールは、数年あるいは数十年前の人間の悪事の報いです。今日私達がしていることは、数十年後の次の世代に大きな止めることのできない被害となつて現れるでしょう。法律家は疑わしきは罰せずといいますが、しかし、環境問題は疑わしきかつたらずぐ手を打たなくてはなりません。原因との因果関係が判らないからといって放置し、やがてその因果関係はつきりするほど事態が進んでしまえば、その時はもう救いようがないのです。その結果は人類の生存を心配して努力している人にも、それをせせら笑つて自分だけの金もうけに走り優雅に暮している人にも、何の差別もなく襲いかかつてきます。それが自然の法則です。人類などというものは、所詮地球45億年の歴史の中である時現れて、ある時消えていく一つの存在様式であつて、それがなくなつたからといって地球がどうなるというようなものではありません。どうせ消えるのなら、何とか美しく消えよう

—というのが、私の環境論倫理学です。環境や地球にやさしく、などというのは言葉のごまかしであり、人間の自然に対する思い上がりです。

さて、北極海でもこの美しく亡びるための努力が少しずつですが進んでいます。一九九〇年からは、ナンセンのフラム号探検百年記念北極海研究計画が発足して、一九九一年には米・独・スウェーデンの大型砕氷船が勢揃いして北極点へ向い、極点の周辺の氷上に沢山の自動観測器を設置してきました。ノルウェーではフラム号と同じように、氷に強い船を氷の中へ乗り入れ、三年かかつて氷と一緒に北極海を横断しながら研究調査をしようという計画が進んでいます。カナダでも北極海沿岸大陸棚研究委員会があつて活躍しています。新生ロシアは、シベリアの北を通る北東

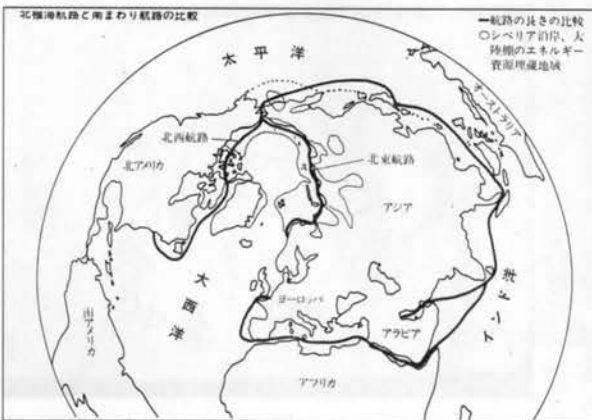


図-1 北極海の東北航路

航路を世界の船に公開するために、大規模な海水・気象・生物環境の研究を提案し、(図1)日本も大きな資金援助をしようとしています。南極ばかりに片寄っていた日本の極地研究所にも一九九一年に北極部門ができ、その初めての研究基地がノルウェー北極圏の島、スピッツベルゲンの北緯七八度付近にできました。(写真-5)そこでは、氷河の氷を底まで穴を掘って取り出し、一万年位前までの気候の変化を調べる仕事とか、大きなアントナを使って、オーロラを通して太陽エネルギーの変動を調べる仕事なども進んでいます。かつての私のように、今大町の山博で学んだり、山に親しんだりしている人々の中から、世界の科学をする人が現れることを心から期待しています。

ノルウェー国立極地研究所教授
ノルウェー在住



写真-5 氷河穴を掘って1万年前までの気候変動を調べている

鹿島・狩野家『登高』の人達

丸山 彰

大町の西の空を区切って立つ山やまの姿は雄大壮麗、その美しさは言葉に尽くせないものがある。なかでも形のいい双耳峰と削り取ったような鋭い急峻な岩壁をもつ鹿島槍は、とりわけ美しく人びとをひきつけてやまない。

郷土の先輩登山家・百瀬慎太郎は生前「後立山連峰とは富山側からの呼び名で、鹿島槍連峰でなければならぬ」とよく語った。鹿島槍はその美しさや風格から、連峰の代表的な山であるといつてよいだろう。

明治三十八年、日本山岳会が誕生して登山は普及し、大正末期には夏の北アルプスの峰みねは殆んど登り尽くされ、若い人たちは次に雪と氷と岩を求めての登山をするようになり、多くの大学や高専に山岳部が生まれ、本格的な登山が盛んに行なわれ始めた。

鹿島槍は入山が容易な上に、急峻な岩場と



バリエーションルートに富んでいることから、若いクライマーにとって魅力の山であった。

昭和五年十二月、立教大の堀田弥一らが、積雪期の初登頂を果たしたことで、大学、高専の山岳部の人たちの注目を集め「鹿島槍の北壁、奥壁時代」と言われる先鋭な登山家たちの活動が盛んに行なわれるようになった。

鹿島槍へは大町から傾斜の緩い平坦な道を歩いて十二キロ。十一軒の農家がひっそりと佇まう鹿島集落を根拠地にして登られた。

この狩野久太郎、治喜衛（さきの夫人）親子の家が宿となり、立ち寄る人たちは、温く迎えられてゆき届いた親切をうけた。

昭和五年、大町の名案内者桜井一雄は狩野家に、記念帳を備えることを勧め、登山記念帳『登高』が生まれた。

最初の記帳者は後日、日本初のヒマラヤ遠征でナンダ・コット（六八六七米）の初登頂の快挙を果たした立教大隊長・堀田弥一である。以来記念帳には、錚錚たる登山家が名前を連ね、深い思いを寄せており、わが国登山史上貴重なものとなった。今は百冊を超え、人数は膨大で数え切れない程である。創期を主に、筆者が気づいた人達は次のようである。

堀田弥一、小原勝郎、浜野正男、山縣一雄、湯浅巖、加藤文太郎、船田三郎、小笠原勇八、今西錦司、伊藤憲、四手井綱英、今西寿雄、



中村清太郎、辻村太郎、児島勘次、小谷部全助、鈴木正彦、海野治良、田辺和雄、川崎精雄、船越好文、関根吉郎、横有恒、百瀬慎太郎、田口二郎、足立源一郎、山川勇一郎、三田好子、三田正子、関田美智子等の方々で杖拳にいとまがないが、載せる人を見落としていたらご容赦を頂きたい。

許された紙数の中で抽出して記帳を載せる。
「昭和五年十二月十八日 快晴を迎ひ鹿島槍ヶ岳に登頂 昭和五年十二月二十六日 堀田弥一」
「昭和六年二月八日〜十二日 二月十一日 鹿島槍へ登る 神戸市笠松通九丁目三四 加藤文太郎」
「昭和八年四月二十七日〜五月六日 四月三十日東尾根より北槍に登り八峰キレット小舎へ 天候不良積雪状態及雪質思はしからず望を断ちて下山 立教大学山岳部 小原勝郎」

湯浅巖 堀田弥一

「内藤況三 昭和九年十一月五日 東尾根ヨリ鹿島槍二登攀 六日夜釣尾根ニ於テ吹雪ニ遭難シ小谷部全助氏一行ニ発見サル、救援隊諸氏ノ挺身ニヨリ十七日遭難ノ収容ニ成功セラル感泣ニ堪ヘズ記シテ載ス 昭和九年十一月十八日 兄内藤藤比天夫、中人」

「三十六年五月十四日 今回は山登りに非ず雨の鹿島部落へポロ車で新緑をさぐる 中谷龍一 山川勇一郎」（農家の写生画あり）
「四十年ぶりに鹿島を訪ね思い出の美女にお眼にかかることができましたほんとうにうれしうございませす 昭和四十二年八月二日 今西錦司」

「鹿島槍ヶ岳荒沢尾根 昭和四十一年三月二十一日 連日吹雪ラッセル多く 初志貫徹為ならず 来年再度来たらむ！ 水島 関田」

右の関田美智子は、東京学芸大を出て三十七年から五十年まで単独或いは友人と雪の鹿島槍を訪れること十四回延べ七十三日を山上で過ごした。他にも沢山の山歴があり、マナスル、マッキンレーにも遠征。秀れた女流登山家だったが、五十一年五月 穂高・間ノ岳で転落。三十六歳の生涯を閉じた。通い続けた鹿島槍の夜、遙か下方に瞬く大町の灯に、すさぶ吹雪の聲に、何を想い、何を考えていたのだろう。哀悼の念に堪えず特筆した。
（日本山岳会会員・大町山博館嘱託員）

山と博物館 第38巻 第6号
一九九三年六月二十五日発行
発行所 千歳長野県大町市 TEL027-2211
大町山岳博物館
印刷所 長野県大町市俵町 大栄タイムス印刷部
定価 年額 一、三〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四）一三三九三三